

ハンセン病の人々と交わる聖フランシスコについての伝記の表現

—信仰のまなざしで味わういくつかの気づき—

《聖フランシスコの生涯をていねいに味わいたい人向け④》

(1) 聖フランシスコの『遺言』のことば

アッシジの聖フランシスコは、騎士になろうとしましたが、それをあきらめ、アッシジへ戻ります。

1205年8月の初旬、ハンセン病の人々と交わります¹。聖フランシスコは、『遺言』の冒頭において、この出来事を「回心のはじまり」と捉えています。次のように記しています。

「1 主は、わたし、兄弟フランシスコに、回心を行うことを次のように始めさせてくださいました。わたしが罪の中にいた頃、ハンセン病の人々を見ることは、あまりにも苦いものに思われました。2すると主ご自身がわたしを彼らの中に導かれ、また、わたしは彼らと共にいつくしみを行いました。3 また、彼らのもとから離れると、わたしには苦く思っていたことが、わたしには心と体の甘いものに変えられました。その後、わたしはしばらくとどまり、世から出ました」。

こうして聖フランシスコは、「自分で越えられない弱さを神さまがへりくだって受けとめながら、あたたかなところへ変えてくださる」ことを体験しました。

(2) 様々な伝記の捉え方

一方、古い時代の伝記は、聖フランシスコとハンセン病の人々との交わりを、聖フランシスコの『遺言』とは異なる形で捉えているように見えます。伝記の多くは、ハンセン病患者の人々との最初の深い交わりと共に、聖フランシスコはハンセン病の人々のもとをしばしば訪れていた出来事も記しています。

伝記	関連する前段階の出来事	場所	ハンセン病の人々との最初の出会いの行為	ハンセン病の人々との最初の交わりの後に交わった際の行為	『遺言』の引用	背景にある倫理的メッセージ
1 チェラーノ 17		先にグッピオでの出来事を記した後で、さかのぼって(アッシジでの)出来事を記す。	神さまの(恵みと)力によって、勇気を出し、一人のハンセン病患者に近づき、接吻。	共に暮らし、からだを洗い、膿で満ちた傷の手当てをする	1節から2節を引用しつつ、回心前は2マイル離れたところでも手で鼻を覆う様子を描写	謙遜を愛し、自分自身をさげすみ、勝利する
4 チェラーノ 8		先にグッピオでの出来事を記した後で、さかのぼって(アッシジでの)出来事を記す。	神さまの愛により、自分に打ち勝って、一人のハンセン病患者に接吻。	傷を洗う	直接的な引用なし。ハンセン病患者の療養所を見ると手で鼻を覆う様子を描写	自分自身をさげすみ、自分自身について考えるのをやめる
ユリアノ 12		先にグッピオでの出来事を記した後で、さかのぼって(アッシジでの)出来事を記す。	自らを奮い立たせ、自分自身を克服し、一人のハンセン病患者に接吻	傷口を謙遜に洗い、膿の手当てをする	直接的な引用なし。ハンセン病患者の療養所を見ると手で鼻を覆う様子を描写	謙遜から自分自身をさげすみ、自分自身に勝利する
三仲間 11	望んでいるものを手放すなら、甘いものと苦いものが逆転すると神さまから語りかけられる。	(アッシジにて)一人のハンセン病患者との出会いの後、ハンセン病患者たちのもとを訪れる。	神さまにおいて勇気を得、本能に鞭打ち、馬から降り、一人のハンセン病患者にお金を渡し、手に接吻。ハンセン病の人からは、平和の接吻を受ける	一人ひとりに施しを与え、手に接吻する。神さまの恵みによって、ハンセン病患者たちの仲間、友となり、彼らの中に入り、へりくだって世話をする	直接的な引用なし。内容を豊かに表現し、苦いものが甘いものになり、やさしさを抱き、神さまの恵みによって、ハンセン病患者たちの仲間、友となり、彼らの中に入り、へりくだって世話を	神さまによって勇気づけられて、望んでいるものを手放し、神さまの助けによって自分をさげすみ、自分に打ち勝つ

¹ Cf. DI FONZO, Lorenzo, *Per la cronologia di S. Francesco. Gli anni 1182-1212*, Edizioni Miscellanea Francescana, Roma 1982, p.112.

伝記	関連する前段階の出来事	場所	ハンセン病の人々との最初の出会いの行為	ハンセン病の人々との最初の交わりの後に交わった際の行為	『遺言』の引用	背景にある倫理的メッセージ
2 チェラーノ 9	腰の非常に曲がった女性を悪魔から見せられ脅される一方、世のむなししい快樂を手放し靈の喜びを得るよう神さまから語りかけられる。	(アッシジにて) 一人のハンセン病患者との出会いの後、ハンセン病患者たちのもとを訪れる。	神さまの命に背けず、約束に忠実であろうと、馬を降り、一人のハンセン病患者に駆け寄り、病人が何かもらえんと思つて出した手に接吻し、お金を渡す。馬に乗ると、ハンセン病患者の姿が消える。	一人ひとりにお金を渡し、手と口に接吻	直接的な引用なし。苦いものが甘いものになることが神さまから語りかけられ、出会いの後には喜びと晴朗さ。	神さまを知るために、甘いものではなく苦いものを選び、自分をさげすむ
大伝記 1・1・4-6 1・2・6	祈る生活。天の祖国への愛によって、この世のすべてのものを見下すよう軽蔑。隠された宝を見出し、高価な真珠を全財産で得ようとする。世をさげすみ、自分自身への勝利を目指す。	(アッシジにて) 一人のハンセン病患者との出会いの後、ハンセン病患者たちのもとを訪れる。 グッピオ? スポレート (ハンセン病?)	キリストの騎士になるために自分自身に打ち勝つべきことを思い、馬を降り、一人のハンセン病患者に駆け寄り、抱きしめる。ハンセン病患者が施しを求めて両手を出したので、お金を渡し、接吻する。馬に乗ると、ハンセン病患者の姿が消える。	ハンセン病の人々の住まいを度々訪れ、大いに施しをし、深い同情と愛情から、手や口に接吻。 ハンセン病の人々のところに住む。彼らの足を洗い、傷に包帯を巻き、傷口から膿を取り、化膿したところをきれいにし、傷に接吻。口と頬が腐る病気の人の顔に接吻。傷に接吻すると、その傷は消え、その人は健康になる	直接的な引用なし。出会いの後には大きな喜びに満たされる。	祈りの中で願ひ求める必要性。清貧の精神と、心の底からの謙遜の気持ち、深いいつくしみのこころの重要性。聖痕の出来事と結びつけ、自分の十字架を背負つて従うこと、自分自身を完全にさげすむこと、謙遜にやさしくハンセン病患者たちに仕えることを結びつける。神さまが、靈魂と体の病気を癒す権能をお与えになる。
小伝記 1・1・8		他の伝記のように、二つの出来事をはっきり分割していない。	恵みを豊かにいただく中で、ハンセン病患者たちの足を洗い、傷口の膿を搾り、拭き、包帯を巻く。非常に謙虚に奴隸の姿勢で、ハンセン病患者にいていねいに関わり、傷に接吻する。		直接的な引用なし。	謙遜を愛し、自分と世をさげすむこと。傲慢さを靈の掟に従わせるために、傷に接吻。

- *1 チェラーノ：チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』(1229年)
- *4 チェラーノ：『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』(1230-1240年)
- *ユリアノ：シュバイエルのユリアノ『聖フランシスコの生涯』(1232-1235年)
- *三仲間：『三人の仲間たちによる伝記』(1276年以降または1244-1247年)
- *2 チェラーノ：チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』(1247年)
- *大伝記：聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの大伝記』(1263年)
- *小伝記：聖ボナヴェントゥラ『聖フランシスコの小伝記』(1266年)

- (3) チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』『靈魂の憧れの記録』を思いめぐらして
- ・最初に「一人」のハンセン病の人と出会うという表現の効果：聖フランシスコは、『遺言』において、「複数のハンセン病の人々」に出会っています。しかし、チェラーノのトマスだけでなく、小伝記の描写を除いてほとんどの伝記は、最初に「一人のハンセン病の人」と出会った出来事を記しています。このような描写によって、結果的に、聖フランシスコとハンセン病の人との出会いを集中して思い浮かべることができる効果があるように見えます。
 - ・ハンセン病の人への接吻—イエスさまを引き渡す行為ではなく、イエスさまのように見捨てられた人を大切にす行為—：聖フランシスコは『遺言』の中では触れていませんが、伝記では、ハンセン病の人に接吻しています。この行為は、伝記の底本において、イスカリオテのユダがイエスさまに接吻する聖書箇所を思い起こさせるもの（マルコ 14・45）として捉えられています²。イスカリオテのユダは、イエスさまと親しい者であることを示して接吻しました。しかしそれは、宗教的権威者たちにイエスさまを引き渡すためのしるしでした。チェラーノのトマスは、ハンセンの人々に対する聖フランシスコの接吻を、「謙遜を愛し、自分自身をさげすみ、自分自身に勝利する行為」として捉えています³。他方、騎士となった聖マルティノが、街の門に入る際に、みすぼらしいハンセン病の人に接吻した出来事を参考にしているとも言われます⁴。
 - ・聖フランシスコの弱さを描写し、回心前後のコントラストを強調：聖フランシスコは、『遺言』において、ハンセン病の人々を見るのが非常に「苦い」ことだった、としています。『祝福されたフランシスコの生涯』『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』では、その「苦さ」がより具体的に記されています。それには、回心前後のコントラストが見られ、回心前の聖フランシスコの弱さと、回心後の聖フランシスコの生き方の素晴らしさを強調する効果があるでしょう。
 - ・ハンセン病の人々の「いつくしみ」を具体的に表現—接吻・傷の手当て・お金を授与—：聖フランシスコは、『遺言』において、ハンセン病の人々と「共にいつくしみを行った」と記しています。具体的な事柄が記されていないので、普遍性もあり、いつくしみを根底・中心にして様々な具体的な形を思い浮かべることができます。一方、チェラーノのトマスをはじめ、すべての伝記による描写は、聖フランシスコの姿をイメージしやすい利点がありますが、行為が特定されています。チェラーノのトマスの伝記では次のように記されています。
 - 『祝福されたフランシスコの生涯』『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』：最初の出会いにおいて「接吻」。その後の交わりにおいて「傷の手当」
 - 『靈魂の憧れの記録』：最初の出会いにおいて「お金を渡し、手に接吻」。その後の交わりにおいて「お金を渡し、口と手に接吻」。
 - ・神さまの働きかけよりも人の優れた行為を強調？：『祝福されたフランシスコの生涯』『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』『靈魂の憧れの記録』は、神さまの恵みによってハンセン病の人々と交わることができたことだけでなく、自分をさげすむ行為など聖フランシスコの姿勢が強調されています。聖フランシスコの聖性を描こうとする意図が感じられます⁵。
 - 『祝福されたフランシスコの生涯』：最初の交わりでは、神さまの恵みと力によってハンセン病の人に接吻できますが、それによって自分をさげすみ、自分自身に勝利したことが述べられています。

² *Fontes franciscani*, MENESTÒ, Enrico e BRUFANI, Stefano (a cura di), Edizioni Porziuncola, S. Maria degli Angeli – Assisi, 1996, p.292, n.d.

³ Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, Edizioni Porziuncola, S. Maria degli Angeli – Assisi 2007-20242, p.258.

⁴ Cf. *Francis of Assisi: Early Documents, Volume I The Saint*, ARMSTRONG, Regis J., HELLMANN, J. A. Wayne, and SHORT, William J. (Edited by), New City Press, New York, London and Manila 1999, p.195, n.c.

⁵ Cf. *La letteratura francescana Volume II. Le vite antiche di san Francesco*, LEONARDI, Claudio (a cura di), Fondazione Lorenzo Valla e Arnoldo Mondadori Editore, 2005, p.505.

回心後には、謙遜を深く愛する者として、ハンセン病の人々のところへ向かっています。

- 『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』：最初の交わりでは、神さまの恵みによってハンセン病の人に接吻できます。それによって、自分に打ち勝っており、それからは、自分自身をさげすむことに燃え、自分自身について考えるのをやめています。回心後には、謙遜を深く愛する者として、ハンセン病の人々のところへ向かっています。
- 『靈魂の憧れの記録』：最初の交わりについて記す前に、腰の非常に曲がった女性の姿を悪魔が聖フランシスコに見せています。一方、聖フランシスコは、神さまに力づけられながらむなしい心地よさ・甘さではなく靈的なもの・苦いものを選んでいきます。また、神さまを知りたいなら自分をさげすむように、と神さまご自身から語りかけられています。その後、ハンセン病の人との最初の交わりの際には、立てた誓いと神さまの命令（実際には「秘跡」ということば）に背かないよう望む中で、ハンセン病の人に接吻できています。その後の交わりにおいても、聖フランシスコが甘いものではなく苦いものを選んだことが再び指摘されています。

このように、チェラーノのトマスは、聖フランシスコにおいて、自分をさげすみ、謙遜を愛し、甘いものではなく苦いものをすすんで選ぶ、という姿勢を見えています。他方、聖フランシスコは、『遺言』において、ハンセン病の人々と交わることができた際に、自分の力というよりも神さまの働きかけを強調しています。

『遺言』において「回心」と訳せることば (penitentiam) は、教会の長い歴史の中で、どちらかというところ、断食、肉を避ける食事、放棄、粗布・馬糞折りの着用、鞭打ち、多くの祈りなど、外的な行為を実践することによって節制を実践すること、いわゆる「償い」を指すようになりました。秘跡に関しては、こんにちの「ゆるしの秘跡」が「償いの秘跡」と呼ばれていました。12世紀から13世紀には、償いを実践する様々な集団が存在したことが分かっています。『会のはじまりまたは創立』19や『三人の仲間たちによる伝記』37によると、聖フランシスコたちが自分たちのことを「アッシジの街出身の償いを行う（回心を生きる）者」と述べています⁶。チェラーノのトマスによる伝記では、こうした側面が、聖フランシスコの英雄的な聖性を表現しようとする意図と結びついているように見えます。

このことは、『靈魂の憧れの記録』において、聖フランシスコがハンセン病の人の「口」に接吻したことにも、表現されているように見えます⁷。

「神さまにより頼みながら神さまの助けによって神さまのあたたかなところに生かされる」という根源的な側面は、この世での具体的な側面と結びついています。『遺言』では前者が強調され、チェラーノのトマスの伝記では後者が『遺言』よりも強調されています。

- ・ **ハンセン病の人が消える＝ハンセン病の人の中に神さま（イエスさま）を見る**：『靈魂の憧れの記録』では、最初の交わりにおいてハンセン病の人に接吻し、金銭を渡した後に馬に乗ると、その人が消えたことを、伝記の中ではじめて記しています。このような神秘的な描写は、聖フランシスコの『遺言』にも、それまでの伝記にも見られず、古い伝記では他に大伝記のみが記しています。

これは、ハンセン病の人とあたたかなところを分かち合ったことよりも、マタイ福音書25章31節から46節のように、ハンセン病の人に対して示すあたたかな行為がイエスさまに対して示す行為となることをイメージしているかのようです。

『靈魂の憧れの記録』におけるこのような視点は、最初の交わりにおいて、聖フランシスコが「神の命令を破らずに、立てた誓いに背くことを望まない」中でハンセン病の人に接吻できた、という描写にもほのめかされています。というのも、ここでの「神の命令」という表現は、原文では、「秘跡」というこ

⁶ Cf. URIBE ESCOBAR, Fernando, *L'identità francescana. Contenuti fondamentali del Carisma di san Francesco d'Assisi (Núcleos del carisma de san Francisco de Asís. La identidad franciscana)*, Ediciones Franciscanas Arantzazu, Bitoria-Gasteiz 2017), Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano 2019, pp.281-283.

⁷ Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, p.270.

とば (sacramentum) だからです⁸。秘跡では、目に見えるしるしを通して神さまが働きかけておられます。『靈魂の憧れの記録』では、ハンセン病の人との交わりという目に見えるしるしを通して、神さま、イエスさまと関わっていることがほのめかされています⁹。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **人のうちにイエスさまを見出そうが見出すまいがあなたたかなころを大切に**する：『靈魂の憧れの記録』は、人々から見捨てられた人に対して示すあなたたかな行為がイエスさまに対して示す行為となることをイメージしているように見えます。

このイメージは、現代のフランシスカンの生活にも流れています。実際、フランシスカンの第一会と律修第三会の終生誓願宣立式における質疑には、次のような表現が含まれています。「あなたたちは、この世では旅人、寄留者として、主イエス・キリストとその貧しい御母のいと高い清貧を受け入れ、この世の貧しい人、見捨てられている人のうちに、主のみ顔を見出し、喜びのうちに彼らの生活を分かち合うことを望みますか」¹⁰。

しかし、マタイ福音書 25 章 34 節から 40 節によれば、困難にある人々にあなたたかなころを示した人は、それをイエスさまに対して行っているとは自覚していません。ルカ福音書 10 章 33 節から 35 節におけるサマリア人も、追いはぎに襲われた人に対する行為を神さまに対して行っているとは考えていません。聖フランシスコも、『遺言』の表現によれば、ハンセン病の人々にあなたたかなころを初めて示した際にその行為をイエスさまに対して行ったとは記していません。意識しなくても神さまの望みに適った形で示された、人としての深いあなたたかなころがそこにはあります¹¹。

神さまは限りなくいつくしみ深いかたです。ですから、意識しなくても、深いあなたたかなころは、無償のものであり、神さまが無償でくださるものでしょう。

わたしたちが、意識していようが意識してまいが、神さまの助けによって、神さまのあなたたかなころに生かされることができれば。

- ・ **神さまのあなたたかな働きかけと人のあなたたかな行為**：チェラーノのトマスは、聖フランシスコの聖性を描くために、聖フランシスコの英雄的な行為を強調しています。しかし、その行為も、神さまが支え、生かしてくださっている中でできることです。そして、チェラーノのトマスによる伝記は、聖フランシスコが謙遜を大切にし、自分をさげすんだことを伝えています。いつくしみ、あなたたかなころの具体的な行為は模範になりますが、同時に、聖フランシスコの『遺言』を踏まえると、神さまのあなたたかなころ、神さまが支え生かしてくださっていることが重要です。

聖霊の助けによって、わたしたちが神さまのあなたたかな働きかけを受けとめ、それに少しずつ応えることができれば。

(4) シュパイエルのコリアノ『聖フランシスコの生涯』を思いめぐらして

- ・ **自分自身への絶えざる戦い**：コリアノは、チェラーノのトマスの描写を利用し、簡潔にしながらも、表

⁸ *Fontes franciscani*, p.451. *Francis of Assisi. Early Documents. Volume II*, ARMSTRONG, Regis J., HELLMANN, J. A. Wayne and SHORT, William J. (Edited by), New City Press, New York, London and Manila 2000, p.248, n.a.によれば、チェラーノのトマスは、『祝福されたフランシスコの生涯』『靈魂の憧れの記録』『奇跡の書 (3 チェラーノ)』において、聖フランシスコの姿を描くためにこのことばを 14 回用いています。聖痕 (1 チェラーノ 90、114、2 チェラーノ 203)、エウカリスティア (2 チェラーノ 185、201、3 チェラーノ 28、40)、象徴的な意味を含む行為 (2 チェラーノ 9、68、126) に関して用いています。

⁹ Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.269-270.

¹⁰ CONFERENZA DEI MINISTRI GENERALI DEL PRIMO ORDINE FRANCESCANO E DEL TERZO ORDINE REGOLARE, *Rito romano serafico della professione religiosa per il primo Ordine francescano, Frati Minori, Frati Minori Conventuali, Frati Minori Cappuccini e il Terzo Ordine Regolare*, Editrici Francescane, 2001, p.47.

¹¹ Cf. MARANESI, Pietro, *Per-dono per lo tuo amore. La via alla pace di Gesù e Francesco d'Assisi*, Messaggero di sant'Antonio, Padova 2025, pp.107-109.

現を変えました。そのような中、神さまからの恵みに触れながらも、聖フランシスコが自分をさげすみ、自分に打ち勝つことをより強調し、自分自身への絶えざる戦いにまで触れています。「謙遜に自分をさげすみ、また、他者からさげすまれることを気にせず……彼らに献身的に仕え、傷口を謙遜に洗い……自分を奮い立たせ、自分自身を支配し……自分をさげすむことにより熱く成長し、そして自分自身に完全に勝利をするまで、自分自身への絶えざる戦いをはじめた」。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- **絶えざる回心の歩み**：聖フランシスコは、騎士になるために戦う生き方を手放しました。では、靈的に戦うことを選んだのでしょうか。『遺言』では、聖フランシスコの力や努力よりも神さまのいつくしみ深い働きかけが強調されています。

とは言え、聖フランシスコは、自分の力で戦い続けるわけではありませんが、この先も、受け入れにくい人々に次々と出会う中で、神さまに支えられながら、あたたかくへりくだるイエスさまのところに留まり続けようとしていきます。

イエスさまは、自分を捨て、自分の十字架を担うよう、わたしたちを招いておられます（マルコ 8・34 など参照）。「自分を捨てる」行為は、こんにちでは、良いことには見えないかもしれません。しかし、その根本、中心は、あたたかくへりくだるイエスさまのころを最も大切にすることでしょう。神さまの助けなしには、そのような歩みをたどることはできません。

他方、世の中では、学力、功績、腕力、財力、出自、地位、名誉、美貌など、何らかの形で力のある人が称賛されがちです。それらのものがすべて悪いわけではないでしょう。しかし、それらのものにあまりにもとらわれて、あたたかくへりくだるイエスさまのころを大切にできないなら悲しいことです。努力も、神さまが様々な形で支え、生かしてくださる中で、実行できることです。

わたしたちは、聖霊の助けによって今直面している困難を素直に神さまにおゆだねしながら、神さまの助けによって困難においても、あたたかくへりくだるイエスさまのころを少しずつ大切にできたら。

(5) 『三人の仲間たちによる伝記』を思いめぐらして

- **歩むべき道を求める中での出来事**：チェラーノのトマスは、複数のハンセン病の人々との交わりを、すべてを手放した歩みの後に記しながら、その流れの中で、ハンセン病の人との最初の交わりに触れています。

『三人の仲間たちによる伝記』は、ハンセン病の人との交わりに関する 2 つの出来事を、聖フランシスコが聖ダミアノ教会の十字架像から声を聞く出来事の前に位置づけました。このようにして、聖フランシスコの『遺言』の流れに近い形となっています。分かりやすい形で、聖フランシスコが回心の歩みをたどる途上での出来事として記しています。

- **世のものや自分をさげすみ、自分に打ち勝つことと、ハンセン病の人との交わりの結びつき**：『三人の仲間たちによる伝記』では、ハンセン病の人との最初の交わりの前に、神さまの望みを知るためには所有したいと望んでいるものをさげすみ憎むように、と神さまから語りかけられています。この伝承に通じる逸話が、チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』にも、記されています。

また、ハンセン病の人との最初の交わりの後には、自分自身をさげすみ、神さまの恵みによって完全に自分に打ち勝っています。

このように、ハンセン病の人との交わりにおいて聖フランシスコの英雄的聖性を表現する傾向は、チェラーノのトマスほどではないものの、共通して見られます。

- **2 種類の接吻＝深い敬意と賜物**：チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの生涯』『再発見された、祝福されたフランシスコの生涯』、シュパイエルユリアノ『聖フランシスコの生涯』という三つの伝記では、ハンセン病の人の身体のどこに接吻したかは、記していません。

『三人の仲間たちによる伝記』では、聖フランシスコは最初の交わりにおいて、ハンセン病の人の手に

接吻しています。これは、騎士道精神において深い敬意を示す行為をほのめかしている、と言われます。チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』では、聖フランシスコは手に接吻していますが、これは、ハンセン病の人が何かをもらえんと思つて出した手に対して行つたものなので、関係性が異なります。

『三人の仲間たちによる伝記』ではさらに、他の伝記には見られない記述があります。ハンセン病の人が聖フランシスコに対して「平和の接吻」をした、という記述です。それは、ハンセン病の人に敬意を表した聖フランシスコの側からすれば、ハンセン病の人から接吻をいただくのは、(騎士と君主との関係を想像すれば分かりやすいですが)素晴らしい賜物のようなものです。平和が主からいただくものであることがほのめかされているとすれば、神さまとの和解を思い起こすことができるのではないのでしょうか¹²。

- ・ **ハンセン病の人々のもとにしばらくとどまる聖フランシスコ**：『三人の仲間たちによる伝記』では、聖フランシスコが『遺言』においてハンセン病の人との最初の交わりした後、「わたしはしばらくとどまり」と記していることをうかがわせる表現を記しています¹³。「神の恵みによって、ハンセン病の人々と親しい者、友となりました。……こうして、彼の『遺言』で証しているように、彼らの中にとどまり、また謙遜に仕えていました」。聖フランシスコは、ハンセン病の人々と対等な立場になっていることがうかがえます。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **受け入れられない人との和解をもたらしてくださる神さま**：聖フランシスコにとって、ハンセン病の人を見ることはあまりにも苦いことでしたが、神さまによって聖フランシスコは、彼らの中に導かれ、彼らと共にいつくしみを行いました。神さまによって人との和解がもたらされた、と考えることもできるでしょう。

わたしたちの生活においても、自分と難しい関係にある人との関係が改善されることもあるでしょう。他方では、人との関わりで生じた深い傷がなかなか癒されず、良い関わりが築けない人もいるかもしれません。神さまの助けが必要とされます。そのため、わたしたちは、聖霊の助けによってありのままを受けとめ、神さまにおゆだねしながら、自分にできるあたたかなことを知って実行できる力をいただけるよう願えたら。

(6) 聖ボナヴェントゥラの『大伝記』と『小伝記』を思いめぐらして

- ・ **隠された宝・真珠を得る方法とハンセン病の人を受け入れる行為の結びつき=イエスさまとの結びつき**：これまで見たとおり、チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』と『三人の仲間たちによる伝記』には、ハンセン病の人との最初の交わりに、前置きのような逸話があります。

— **チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』**：腰が非常に曲がり、恐怖を抱かせるような女性の姿を、悪魔が聖フランシスコに見せます。他方、聖フランシスコは、神さまに力づけられながらむなしい心地よさ・甘さではなく霊的なもの・苦いものを選んでいきます。また、神さまを知りたいなら自分をさげすむように、と神さまご自身から語りかけられています。

— 『三人の仲間たちによる伝記』：神さまの望みを知るためには所有したいと望んでいるものをさげすみ憎むように、と神さまから語りかけられています。

『大伝記』では、聖フランシスコが、新しい歩みを少しずつはじめている様子を、隠された宝を見つけ、真珠を得るためにすべてを売り払う、イエスさまのたとえ(マタイ 13・44-46)のイメージが用いられています。つまり、ハンセン病の人との交わりが、イエスさまとの結びつきで捉えられているように思えます。

- ・ **キリストの騎士になることとハンセン病の人を受け入れる行為の結びつき**：『大伝記』では、ハンセン病

¹² Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.264-265.

¹³ Cf. *ibid.*, p.266.

の人との最初の交わりの直前に、前述のイエスさまのたとえのイメージを用いた後に、「キリストの騎士になるために、自分に打ち勝つことから始める」という表現（『大伝記』1・1・4）が記されています。そして、ハンセン病の人に出会うと、「キリストの弟子になることを望むなら、自分に打ち勝つべき」ことを思い起こし、馬から降りてハンセン病の人に近寄っています。

聖フランシスコの『遺言』では、神さまからの働きかけによって、ハンセン病の人とつくしみを分かち合っています。しかし、『大伝記』では、自分に打ち勝ってハンセン病の人と交わることによって、キリストの弟子になることを目指しているように見えます¹⁴。

聖フランシスコは、戦場で手柄を立てて騎士になろうとしていた頃、多くの武具に満たされた宮殿の夢を道中、見えています。この夢のイメージが、「キリストの騎士」のイメージの布石となっています。他の伝記では、その多くの武具は、『会のはじまりまたは創立』が「十字のしるしがあった」と記している以外には、『大伝記』1・1・3だけが「キリストの十字架を示す」と表現しています。

- ・ **十字架につけられたキリストを大切にすること、自分をさげすむこと、ハンセン病の人を受け入れることの結びつき**：『大伝記』は、この三つの側面を結びつける形で表現しています。「ある日、十字架につけられた姿でキリスト・イエスがお現われになりました。……キリストの受難を思い起こすことがこのころの深い部分に刻まれました。……キリストの十字架がここに浮かぶと、涙とため息を抑えられませんでした……『自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい』……ハンセン病の人のようにさげすまれる人として、十字架につけられたキリストのために」。

イエスさまが十字架につけられた姿でお現われになる出来事は、ハンセン病の人との最初の交わりと、その後のハンセン病の人々との交わりとの間に記されています。この構成によっても、ハンセン病の人を受け入れることと、十字架につけられたイエスさまを大切にすることが結びつけられていることが分かります。この「十字架につけられた姿でキリスト・イエスがお現われに」なる出来事は、聖ダミアノ教会の十字架像の板絵が聖フランシスコに語りかけた出来事を指している、と言われています¹⁵。

『大伝記』では、チェラーノのトマス『靈魂の憧れの記録』のように、聖フランシスコが最初に交わることでできたハンセン病の人は、交わりの後、見えなくなっています。ただし、『大伝記』は、はっきりとした形で、ハンセン病の人と十字架につけられたキリストと結びつけています。『遺言』の描写からは、聖フランシスコが実際にこのように捉えていた¹⁶かははっきりしませんが、少なくとも『大伝記』はこのように捉えています¹⁷。

- ・ **奇跡をも生じる聖フランシスコの英雄的聖性**：ハンセン病の人々に対して聖フランシスコの取った英雄的行為について、聖ボナヴェントゥラは、他の伝記に記されていないことを記しています。
 - **最初の交わり**（『大伝記』1・1・5）：ハンセン病の人が何かをもらおうと伸ばした手に、金銭を渡しつつ接吻。
 - **最初の交わりより後の交わり**（『大伝記』1・1・6）：ハンセン病の人々に親しみをもって接する。ハンセン病の人々の住まいを度々訪れ、大いに施しを行い、深く共感して手や口に接吻。
 - **グッピオでの交わり**（『大伝記』1・2・6）：ハンセン病の人々のところに行き、とどまる。熱心に仕え、足を洗い、傷に包帯を巻き、膿を出し、洗う。膿んだ傷に接吻することによって、癒す力を得る。
 - **スポレートでの交わり**（『大伝記』1・2・6）：口と頬が腐食している病気の人に対し、謙遜に傷に接吻することによって癒す。ハンセン病の人々のもとにとどまる。
 - 『小伝記』1・8：ハンセン病の人々の足を洗い、傷に包帯を巻き、壊疽を起こしている部分を取り除き、膿をぬぐう。傷に接吻する。

¹⁴ Cf. *ibid.*, pp.277-278.

¹⁵ Cf. *Fonti francescane. Terza edizione rivista e aggiornata*, Editrici Francescane, Padova 2011, p.607, n.13.

¹⁶ Cf. CHIAPETTI, Dario, *San Francesco stigmatizzato. L'innovazione materno-sacerdotale delle creature*, Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano, 2024, pp.44-45.

¹⁷ Cf. MARANESI, Pietro, *Umiltà, lode e misericordia: i segni santi delle stimmate di Francesco*, Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano 2025, p.19.

傷口に接吻する行為によって感染する危険性もあります。それにも関わらず、接吻している行為には、相手の痛み、悲しみ、苦しみを深く受けとめている様子を示しているでしょう。それは、ハンセン病の人々のもとにとどまる様子からもうかがえます。

しかし同時に、接吻によって癒しの奇跡が生じる描写から、聖フランシスコが多くの人には実現できない奇跡を行う非常に聖なる者であることを示そうとしているように見えます¹⁸。

- **聖フランシスコの『遺言』の表現があまり見られない点＝より小さき兄弟たちがハンセン病の人々への奉仕をあまりしなくなった時代？**：『小伝記』は、時課の典礼で朗読されることを目的としているので、『大伝記』の内容を大幅に省略しています。ハンセン病の人々との交わりについては、非常に簡潔に記され、聖フランシスコの『遺言』を思い起こさせる描写はほとんど見られません。こうしたことから、より小さき兄弟会においてハンセン病の人々への奉仕があまり行われなくなって関心が減っていた、という捉えかたもあるかもしれません。実際には聖ボナヴェントゥラが、聖フランシスコの聖性を強調しようとし、聖ダミアノ教会の十字架像からの語りかけに強調点を置こうとしたため、このような結果になったのかもしれませんが¹⁹。

《こんにちのわたしたちに照らして》

- **あたたかくへりくだるイエスさまのころを大切に**する：『大伝記』の描写は、『遺言』の描写とはかなり異なっています。ただし、「キリストの騎士」という表現を、あたたかくへりくだるイエスさまのころに生かされるイメージとして捉えるなら、わたしたちの大切にすべき歩みと結びつけることもできるように思えます。わたしたちは、聖霊の助けによって、あたたかくへりくだるイエスさまのころを大切にできたら。
- **人の気持ちを深く受けとめる**：聖ボナヴェントゥラが表現したような聖フランシスコの英雄的聖性とそれに伴う癒しの力を、こんにちのわたしたちにそのまま求めることは難しいでしょう。しかし、その表現には、人の気持ちを深く受けとめる様子が示されています。わたしたちは、身体的な癒しができなくても、人を深く受けとめることによってこころの癒し、深い意味での平和を届けることができるかもしれません。わたしたちは、他の人の体験や気持ちをすべて受けとめられるわけではありませんが、聖霊の助けによって、自分なりに他の人の痛み、悲しみ、苦しみを受けとめさせていただけたら。

(聖フランシスコ年記事 n.D)

¹⁸ Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, p.281.

¹⁹ Cf. Id., *Io, frate Francesco. 1. Conversione*, Edizioni Porziuncola, S. Maria degli Angeli – Assisi 2021, pp.111-112.